



## エイズ診療拠点病院と在宅あるいは福祉施設の連携に関する研究

研究分担者： 下司 有加（国立病院機構大阪医療センター看護部）

研究協力者： 東 政美（国立病院機構大阪医療センター看護部）

矢倉 裕輝（国立病院機構大阪医療センター薬剤部）

安尾 利彦（国立病院機構大阪医療センター臨床審理室）

岡本 学（国立病院機構大阪医療センター医療相談室）

### 研究要旨

HIV 感染症は抗ウイルス療法の継続によって医学的にコントロール可能な疾患となり、患者の生命予後も極めて改善した。一方で、長期生存者における慢性期の合併症が課題となっている。それは、骨代謝性疾患や生活習慣病、悪性疾患、CKD など HIV や ART に関連して併発する疾患や HIV 感染症に関連しない疾患への罹患、それらに伴うケアの必要性である。いずれの場合も、エイズ診療拠点病院のみで完結する医療・看護では不十分であり、他疾患と同様の連携、看護の提供が必要となっている。そこで、平成 21 年度から実施している訪問看護師を対象とした研修会を継続的に開催することで、知識の習得の機会を設け、HIV 陽性者の受け入れのための準備性を向上させたい。研修会については、平成 27 年度に実施した全国調査結果から、HIV 陽性者の受け入れが困難とされる地域で開催した。

また、今年度は、「在宅医療を支えるみんなに知ってほしいこと」という訪問看護師向けのパンフレットを改訂に向けた準備を開始した。

### 研究目的

訪問看護を主とする在宅支援提供者が HIV 感染症患者を受け入れる上で直面する課題である職員の知識不足、不安に対して直接的な介入を行い、その評価を行う。

### 研究方法

- 1) 平成 27 年度の全国調査で HIV 陽性者の受け入れが困難という回答が多かった、もしくは、受け入れが可能という回答のなかった地域で研修会を開催。
- 2) 訪問看護師を対象としたパンフレット「在宅医療を支えるみんなに知ってほしいこと」の改訂に向けた準備。

### 研究結果

#### 1) 訪問看護師研修会

##### (1) 研修の実施および参加状況

【静岡】開催場所：JR 静岡駅前パルシェ会議室、開催日：7 月 1 日（土）、受講者 16 名【京都】開催場所：京都駅前会議室 K-office、開催日：9 月 2 日（土）、受講者 17 名。【大分】開催場所：JR おおいたシティ、開催日：10 月 28 日（土）、受講者 5 名【山口】開催場所：YIC 研修センター、開催日：3 月 3 日（土）、申し込み者 4 名。

##### (2) 研修プログラム

HIV/AIDS の基礎知識、HIV 陽性者の看護支援の講義と事例をもとにしたグループワークを実施した。グループワークでは、5 人 1 グループとし、そのグループが架空の訪問看護ステーションと設定。HIV 陽性者の訪問依頼があった際、受け入れまでに起こりうる問題点の抽出と、解決策について話し合った。全

体で約3時間の研修であった。また、いずれの研修会も参加者は訪問看護師、保健師などであった。

### (3) 研修終了後のアンケート結果

アンケートの回収は38名。参加者の背景については、図1,2を参照。

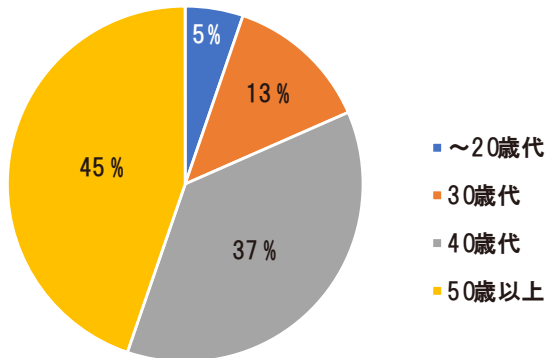


図1 参加者の年齢 (n = 38)

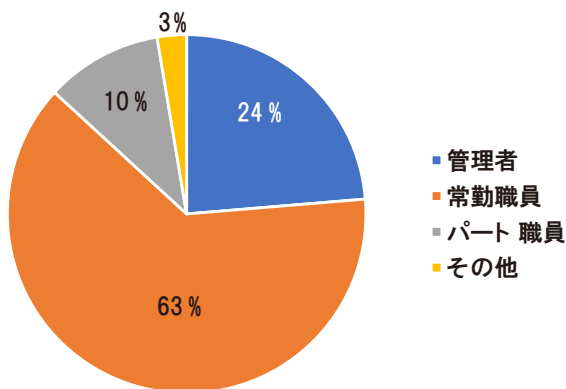


図2 参加者の勤務形態 (n = 38)

24%の人がHIV陽性者の訪問看護経験があり、35%の人が研修会の受講経験があると回答。また、HIV陽性者の受け入れについては、56%が受け入れ可能、44%は準備が必要、受け入れ不可能の回答はなかった(図3)。準備が必要と回答された人の準備内容としては、スタッフの教育・育成が最も多く、

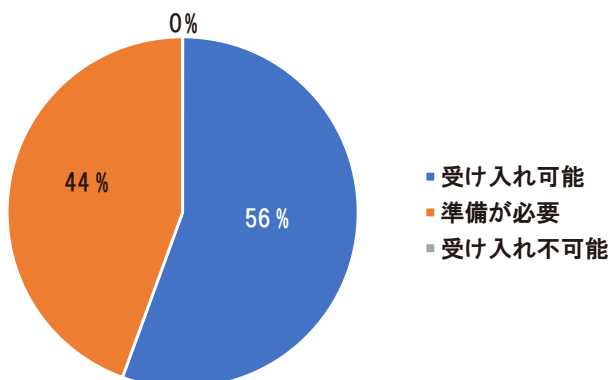


図3 HIV陽性者の受け入れについて (n = 38)

次いでスタッフ間での受け入れに関する同意、HIV拠点病院とのネットワーク作り、感染対策マニュアルの整備などがあげられた。研修会受講後の受け入れ意識の変化については、68%が変化したと回答。以前から支援可能と考えているため変化していないが24%、研修後も支援は難しいと回答した人はいなかった(図4)。

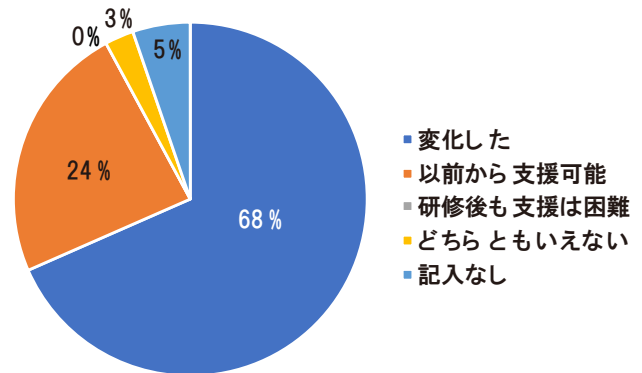


図4 研修後の意識変化 (n = 38)

### (4) 研修全体を通しての意見

- ・私たち自身が知識不足を解消しなければいけない。
- ・今回のような基礎的な研修会の対象者を広げてほしい。県のステーション協議会の研修項目に入れてほしい。
- ・自分が住んでいる都道府県の受け入れ可能な施設の少なさに驚いた。実際に退院支援で何か所かの訪看や施設に断られてしまったことがあった。もっともっと医療者への周知が必要だが、組織レベル、行政レベルで取り組みが必要と感じた。
- ・行政としてできる事について考えた。一度、市の保健師にも研修指導に来てもらいたい。

## 2) 「在宅医療を支えるみんなに知ってほしいこと」の改訂。

薬剤情報や社会制度に関することについてアップデートし、全般的な改訂を予定。次年度には完成し、全国の訪問看護ステーションへ配布予定。

## 考察

### 1) 訪問看護師研修会

2014年度までに実施した研修会では、開催地域が異なるものの、例年HIV陽性者の訪問看護経験は10%前後で推移していた。また、2014年の全国調査では8%、2016年は9%であった。しかし、今回、研修会に参加された事業所における過去のHIV陽性者

の訪問看護経験は 20%を超えており、高い割合であった。このことより、過去の受け入れ経験が研修参加への動機付けとなっている可能性がある。そして、今回、研修会を開催した地域は、2014 年の調査で受け入れが困難と回答している事業所が多い、もしくは、受け入れ可能と回答している事業所がない地域であったため、参加者が極端に少ない地域があった。そのため、過去にも受け入れ経験はなく、受け入れは難しいと考えている事業所に対し、意識を変化させるためにも参加を促す工夫が今後必要である。

研修会全体を通じた意見の中にあるように、保健師に対する知識の普及についても再考が必要である。

## 結 論

- ・ 研修会への参加によって、受け入れに向けた準備性の向上につながった。
- ・ 在宅支援に関わるより多くの医療者に HIV 感染症に関する知識を得てもらうためには研修会の開催や案内に関する工夫が必要である。

## 健康危険状況

該当なし

## 知的所有権の出願・取得状況（予定を含む）

該当なし

## 研究発表

### 1. 論文発表

該当なし

### 2. 学会発表

該当なし